

美濃神戶

# 日吉神社

御鎮座千二百年記念誌

# 目次

ご挨拶	日吉神社 氏子会会長	中村正孝	4
ご挨拶	第四十八代 安八太夫安次	石原傳兵衛	6
ご挨拶	日吉新宮（金幣社日吉神社）宮司	高田義彦	7
十一面観音菩薩像の御縁によせて		白洲信哉	8
日吉神社			11
一・御由緒			12
二・御祭神			14
三・祭事			15
四・日吉神社略年表			16
五・重要文化財			23
六・日吉山王まつり			33
七・歴史資料			48
1・歴代祭主			48
2・古写真			50
3・古絵図			56
4・日吉新宮名称の由緒			61
5・ポスター・絵はがき			64

# 御鎮座千二百年祭報告書

## 一・会議経過

趣意書

諸会議経過報告

## 二・記念事業

日吉神社千二百年祭事業決算

日吉神社千二百年祭事業の概要

惣門修復事業

神輿殿改築事業

大宮本殿修復事業

社務所改築事業

御鎮座千二百年祭

千二百年祭実行委員会名簿

## 三・ご奉賛者名簿

## 四・神輿殿瓦奉納者名簿

## 五・特別奉納品

編集にあたって



## ご挨拶

日吉神社 氏子会会長 中村 正孝

このたび、日吉神社創建千二百年祭記念誌を発売致し、関係者の皆様にご報告出来る機会を得ましたことに対し、心からお礼申し上げます。

私たちの住んでいるこの地、美濃の国は、古くは大化の改新（西暦六四五年）頃から知られており、この「神戸」の地は古代から日本の歴史の上に立派に位置づけられていたと思われます。そんな中であって、私たちが常に心のよりどころとして崇敬厚い日吉神社は、平成二十九年創建千二百年の節目を迎えました。幾多の困難を乗り越えながら、この古い歴史と伝統を連綿と受け継いでこられた先人達に心より敬意を表します。

さて、創建千二百年を迎えるにあたり、準備委員会を経て、平成二十年七月に「日吉神社創建千二百年祭実行委員会」を関係者出席のもと、設立致しました。設立当初より役員各位のご労苦には深く感謝申し上げます。

奉賛活動につきましては、設立以来十年間、本当に多くの先輩氏子総代はもとより、各区長、神社総代、有志団体の皆様方にはお世話になりました。また、地元商店、企業をはじめ、近在の企業様そして多数の神戸町出身の方々のご理解、ご協力を得て今日に至りました。ご奉賛賜りました皆様には心よりお礼申し上げます。

この間、頂戴致しました奉賛金をもとに惣門の修理、神輿殿（拝殿・幣殿）の改築、本殿の修理及び社務所の改築事業を行わせて頂きました。文化財登録建造物については、それぞれ神戸町、岐阜県の補助を受けました。

平成二十九年十月十七日には、創建千二百年祭記念式典を執り行い、当日は、山王総本宮日吉大社より宮司様にお越し願ひ、また、岐阜県神社庁長様はじめ、多くのご来賓の方々の出席をいただき、盛大に行うことが出来ました。さらには、十五日から十七日の三日間は神社宝物の開示・展示をはじめ、白洲信哉氏（白洲正子様 故人 の孫）の特別講演等、多彩な催しを行い多くの人で賑わいました。

本年を新たな節目の年として、更なる日吉神社発展のため、誠心誠意努力する所存でございますので、今後とも皆様方の一層のご支援をお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。



## ご挨拶

第四十八代 安八太夫安次 石原 傳兵衛

日吉山王大権現が、神戸の地に鎮座ましまして以来、千二百年の永き歳月を経て本年ここに記念祭を迎えることができましたことは、新宮創建に関わった当家初代安八太夫安次の末裔として、深い感動と慶賀の念を覚えると共に、後世への責務の重さに身の引き締る思いを感じる次第であります。平安朝の初期より永き歴史の中にあつて、時代の潮流に押し流されることなく、日吉新宮を護って来られました多くの先人達に、衷心より感謝し敬意の念を捧げるものであります。

さて、今や世をあげて心よりも物を重視する時代になっております。四條天皇朝（一二三二年）の貞永式目の第一条に「神は人の敬により威を増し人は神の徳により運を添う」との不朽の名言があります。日吉新宮の門前町として発展してきた神戸町民が幾久しく日吉新宮の杜に寄り添われること願って祝辞といたします。



## ご挨拶

日吉新宮（金幣社日吉神社） 宮司 高田義彦

日吉神社の創立は古く、弘仁八年（八一七）伝教大師の勧請によって時の郡司、安八郷の大領、安八大夫安次が、創建したと伝えられています。

また時を同じくして、神護寺の善学院をはじめ、多数の寺坊が建立されて、この地方政治・文化の中心となって大いに発展してまいりましたが、時には、幾度かの戦禍に遭遇し、神仏分離令など、神社に対して不具合な扱いをなされたりと、時代がうつりかわり、先代が受け継いできた神社が、このたび創立千二百年を迎え、記念事業として、平成二十六年には惣門の修復事業、平成二十七年神輿殿の改築事業、平成二十八年本殿修理事業平成二十九年社務所の改築事業と、記念式典、長い期間にわたり事業を行ってまいりました。お陰をもちまして、無事終えることが出来ました。

今回行ってきた記念事業を、記念誌として百年、二百年と後世に残す事が、今の時代に生きてきた者としての、使命ではないかと思えます。

この事業に対しまして、奉賛のご理解とご協力を賜りましたことに対し、衷心よりお礼申し上げます。



## 十一面観音菩薩像の御縁によせて

文筆家・アートプロデューサー 白洲信哉

二〇一〇年、白洲正子生誕百年「神と仏、そして自然への祈り」展の企画に際し、当社所蔵重要文化財「十一面観音菩薩坐像」をご出陳くださった。そしてこの度千二百年の長き歴史と伝統を受け継いだ当社の記念誌に寄稿するのも、本年没後二十年を迎えた祖母との縁だと深く思う。

今まで見たどの仏像より日本的で、彫刻も、彩色も、単純化されている。宝瓶は失われているが、首飾や瓔珞をつけていた形跡もない。頭上に十一面は頂いているものの、これはあきらかに神像である。そういつて悪ければ、日本の神に仏が合体した、その瞬間の姿をとらえたといえようか。十一面観音は、様々な神に変化するが、美濃ならば白山比咩に違いないと私は思った。

白洲正子「白山比咩の幻像」

ここにある神と仏が合体、習合したおよそ千年の信仰は、非常に日本的な尊い精神だと僕は思う。だが、明治に入ると、日吉山王大権現に代表される権現思想は、政府によって



先の徳川政権、つまり東照大権現と関わりもあり徹底的に葬られ、白山妙理大権現も同じ道を辿る。白山を開いた泰澄大師は、八世紀はじめに白山山頂を極め修行を積み、水より生まれた九頭竜の本地仏十一面観音を感得し、神仏習合の先駆となった。山は先祖の靈魂が宿った聖地であり、山そのものが神とした古来の精神と、泰澄のような修験者が、自然や祖先神と仏教の仲立ちを果たし、本社創建の百年前に白山は開山した。白山神は、比叡山修行僧の守護として降臨し、客人権現として祀られたのだった。伝教大師最澄は、白山神と日吉の神を両輪に、聖地比叡山の守り神として祀ったのである。

さきの白洲の文章は以下の言葉で結ばれている。

本地垂迹という思想は美しい。が、完成するまでには、少なくとも二、三百年の年月がかかっている。はたして私達は、昔の人々が神仏を習合したように、外国の文化とみごとに調和することが出来るであろうか。

#### 白洲正子「白山比咩の幻像」

明治百五十年、今こそ神仏習合の精神が問われている  
ような気がしている。



